オープンカレッジ

時間消費型のまちづくり

円頓寺商店街救った
家と職場以外の場所

「サードプレイス」という言葉をご存じだろうか。私たちは、家と職場を往復する日々を送っている。家がファーストプレイスであり、職場がセカンドプレイスである。家と職場を往復する人生に満足しているだろうか。いや、人生を楽しむためには、家でも職場でもない第三の場所、「サードプレイス」が必要だ。

働き方改革が叫ばれる昨今、創出した余暇時間にどこで何をするかが、個人の生き方の一大テーマになっている。居酒屋で友人とワイワイ飲むのもよし、カフェで静かに本を読むのもよし、スポーツジムで汗をかくのもよし、スーパー銭湯でのんびりするのもよし。お気に入りのサードプレイスを見つけられるかどうかが、その人の人生の満足度に大きくかかわってくる。

さて、話題を変えて、ここからは名古屋の円頓寺商店街の話をしよう。円頓寺商店街もご多分に漏れず、一時期はシャッター商店街となっていた。それが、建築家の市原正人氏らの努力で、少しずつ賑わいを取り戻し、商店街再生の好事例と言われるまでになった。

市原氏が円頓寺商店街に関わるきっかけとなったのは、通りに人が歩いていない寂れた商店街のなかに、満席で入れない賑わう飲食店があることに関心を寄せたことであった。こういった繁盛店を増やすことができれば、商店街に活気が戻る。そう感じた市原氏は、空き店舗の所有者と利用希望者をつなぐ組織として、ナゴノダナバンクを立ち上げ、建物のリノベーションを進めて、多くの店をオープンさせてきた。

そして今や、円頓寺商店街界隈は、飲食店に加え、ボルダリングジムやカブキカフェといった趣味性の高い店など、こだわりとセンスを売りにした店の一大集積エリアとなり、人が集まる場所となった。

円頓寺商店街の再生は、物販中心の従来型の商店街から、飲食店を中心としつつ、体験や鑑賞の場を加えたサードプレイス型の商店街への変身とみることができよう。そもそも、市原氏が目の当たりにした満席の飲食店は、シャッター商店街にありながら、サードプレイスとして機能していたものだ。

郊外の大規模店舗やインターネット通販の台頭により、商店街で物販を成立させることは困難になっている。いかに魅力的なサードプレイスを用意し、人々に何度も足を運んでもらい、そして豊かな時間を過ごしてもらうか。商店街再生の鍵は、時間消費型のまちづくりにある。

椙山女学園大学
文化情報学部准教授
今村　洋一

いまむら・よういち　都市計画・まちづくり。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。博士（工学）。